

完全に掌握できていたわけではなく、反政府勢力が各地で活動し、国内の治安は不安定な状況が続いていた。反政府勢力には内戦期に特殊部隊が結成されたモン族の兵士も多く含まれており、多民族からなるラオス国民の団結は引き続き、重要課題となっていたのである。そうした中、ラオ人の伝統行事である競漕祭が「我々ラオス人が祖先から受け継いできた美しい伝統」とされた意味について、国民統合との関係からの分析があっても良かったように思う。

二点目は、内戦期のパテート・ラオ側の動きに触れられていないことである。もっとも、パテート・ラオの支配領域が北部山岳地帯中心であったことから、ヴィエンチャン競漕祭をテーマとする本書において、パテート・ラオを考察の対象としないのは当然ともいえる。しかしながら、ラオス人民民主共和国は、パテート・ラオの勝利により誕生した国家であり、その政策や思想は内戦期の革命闘争に深く根ざしている。実際、1966年にはラオス愛国戦線（パテート・ラオの大衆政治組織）のスポーツ部隊が新興国競技大会（GANFEO）に派遣され〔Creak 2015: 162-163〕、解放区で出版された文法書や辞書にも「キラ」の語が掲載されている。このことは、パテート・ラオの革命闘争においてスポーツが重要な意味を待っていたことを示すものといえる。伝統に関しても、「祖先から受け継いできた美しい伝統」と類似した表現は、パテート・ラオの出版物に頻繁に見られるものであり、さらに、「諸民族の平等と団結」はパテート・ラオのスローガンでもあった。したがって、革命闘争における「伝統」や「スポーツ」の位置付けや、それらと「諸民族の団結」というスローガンとの関係を分析することは、1975年以降の競漕祭における「スポーツ」と「伝統」の関係を考察するうえでも重要な意味をもつといえる。

以上、評者の気づいた問題点を指摘したが、これらは欠点というよりは今後の課題というべきものであり、先述の本書の価値を少しも損なうものではない。本書の研究のさらなる発展に大いに期待したい。

（矢野順子・愛知県立大学外国語学部）

参考文献

- Creak, Simon. 2015. *Embodied Nation: Sport, Masculinity, and the Making of Modern Laos*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- 矢野順子. 2013. 『国民語の形成と国家建設——内戦期ラオスの言語ナショナリズム』東京：風響社。

三重野文晴（編）. 『変容するASEANの商業銀行』アジア経済研究所, 2020, ix+203p.

ASEANの経済システムの四半世紀は、国際経済の変動に翻弄され大きな変革に直面せざるを得ない試練の時期であった。とりわけASEAN諸国の商業銀行は、1997年アジア金融危機や2008-2009年世界金融危機などの国内外の経済ショックの直撃を受け、2015年にはASEAN経済共同体結成宣言や各国政府の金融・銀行部門改革などの地域的・各国別の政策対応の結果、経営環境の大きな変動にさらされ、市場構造の再編と経営手法の変更を迫られてきた。

本書は、ASEANの商業銀行部門が2000年代以降のこれらの経営環境の変化の中で、経営戦略をどのように変容させてきたかを実体経済の変化との関係に留意しつつ、その意味を追求しようとしている。四半世紀という比較的長期における度重なる経済変動の中で発展途上国の金融機関がどのように対応し経営を持続してきたかという開発金融論の大きな課題に正面から取り組んだものであり、ASEAN諸国金融機関の事例研究としても財務データの分析やそれぞれの市場調査に基づいたものとして高く評価できる。

各章の概要

本書は7章立ての構成になっているが、マクロの金融環境や地域横断的な視点からASEAN商業銀行部門の変化を比較分析する第1部（第1章から第3章まで）と、シンガポール、インドネシア、タイ、フィリピンの商業銀行の事例を紹介する第2部（第4章から第7章まで）からなる。

第1章「序論——ASEANの商業銀行の変容」（三

重野文晴)でまとめられている ASEAN 商業銀行部門の近年の変化は、第一に、外資系銀行が活発に地域市場に参入したにもかかわらず、マレーシア以外の地場商業銀行は依然として貸出業務に集中したままであり手数料業務への転換は限られていたこと、第二に、地場商業銀行の貸出行動がそれまでの製造業部門主体から、不動産、消費、金融などの部門に重点がシフトしたことを指摘する。その背景には、伝統的な地場金融資本以外からの活発な参入があったことと、商業銀行の集約による大規模化が進められたことがあった。また、タイやインドネシアで顕著にみられたように参入規制の緩和により外資系銀行の参入が相次いだこと、大手の日系商業銀行が2010年以降に、ASEAN 経済に対する全方位型の金融サービスの拡大のために積極的に参入することなどがあった。こうした ASEAN 商業銀行部門の変容の結果、域内にネットワークを広げる「ASEAN 銀行」が出現しつつあると結論づける。

第2章「国際経済環境の変化と ASEAN のマクロ経済動向」(国宗浩三)では、ASEAN のマクロ経済・金融市場動向、特に、金融深化、資本市場の拡大、国際金融取引の推移についてまとめる。ASEAN 構成国間で経済格差が存在し、銀行の経営環境も大きく異なる。アジア金融危機後の回復過程にあっても、多くの ASEAN 諸国では金融深化と資本市場の成長も未だ発展途上にあるが、一方で ASEAN 主要国(シンガポール・マレーシア・タイ)は、従来の資金受入国に加えて資金送出国としての役割を果たすようになりつつある。

第3章「財務指標による ASEAN 商業銀行の特徴の分析」(濱田美紀・金京拓司)は、ASEAN 商業銀行の財務状況の変化を整理し、資産上位100行を主要因分析およびクラスター分析により、グループ化を試みた。分析結果によると、大別して①地域の大手行、②インドネシアの上位行、③フィリピンの上位行および各国の下位行、④外資系銀行の4つのクラスターに分類することができた。

第4章「ASEAN における商業銀行の域内統合と外資の参入」(清水聡)は、シンガポールの大手3行を対象に海外進出の動向を分析した事例研究である。2011年4月の ASEAN 金融統合フレームワー

クの策定、国際金融危機後の新興国向け信用の拡大、フィンテックの拡大を背景として、シンガポールの大手銀行は域内外の市場に展開していったが、域内では金融包摂の水準が低い成長余地を残すフィリピン・インドネシア・後発 ASEAN 諸国への進出が目立った。

第5章「インドネシア商業銀行の外資導入による変容」(濱田美紀)は、アジア金融危機後に国有化され、外国資本への売却の対象となったインドネシアの商業銀行の再編と所有構造の変化を考察する。インドネシアでは、銀行市場の高い利ざやと利益率を狙い、シンガポールやマレーシアなどの外国銀行による国内商業銀行の買収が目立った。その結果、商業銀行部門は資産規模や健全性面で変化は小さかったが、零細中小企業への貸出意欲が、国営・地方開発銀行と民間銀行で異なるという変化が見られた。

外国銀行の参入後のタイ商業銀行の競争環境に与えた影響については、第6章「タイ商業銀行の所有・収益構造の変容」(三重野文晴・芦宛雪)で論じられている。アジア金融危機後の2段階の金融セクター・マスタープラン実施の結果、外資銀行と地場銀行の新規参入が促進されたものの、市場の競争性の向上には効果が小さかった。この市場構造の変化は、商業銀行の貸出先を製造業から個人消費・金融部門へのシフトをもたらした。

第7章「フィリピン商業銀行部門の現状」(柏原千英)では、フィリピン商業銀行の事例を分析している。中央銀行は2000年以降、金融部門改革として、外資銀行・資本の参入促進、商業銀行の財務基盤の改善・強化、金融包摂の重視を進めてきた。その結果、フィリピンでは主にユニバーサル銀行が主体となって商業銀行や貯蓄銀・地銀を買収し、支店網を拡張させた。また、外資との戦略的提携と企業グループを中心として金融コングロマリット化が進んだこと、通信技術の向上を背景に金融デジタル・サービスの提供基盤が拡大したことも指摘した。

批評

冒頭で指摘した通り本書は、ASEAN 諸国を対象に途上国金融の近年の変容を綿密に分析した優れ

た研究書であるが、本書の後継となる研究の発展を期待して、いくつか指摘したい。

第一に、本書全体の構成と各章のつながりについてである。第3章では、ASEAN 商業銀行の上位100行を財務データに基づいて4つの大きなクラスターに分類することができた。国・地域的要因を超えて類似性を持つ銀行の分類ができたが、これらのグループ分けに基づいてそれぞれのグループがどのような変容を遂げたかが後章で整理されなかったのが残念である。第3章で分析・整理された異なる銀行グループごとに、各章で論じられている地域的・各国の銀行改革や外国銀行の参入、消費者市場の変化などに対して各グループがどのように対応し、その結果、どのような変容を遂げたかが描かれているのであれば、一冊の研究書としてさらに一体感のあるものになったと考えられる。また、序章で指摘したように国のクロスボーダー取引を主体とする「ASEAN 銀行」が現出したことが近年の変容の第一の点とすると、国別の変容の分析だけでなく域内（あるいは複数国）を一つの市場として活動する銀行の分析も求められるかもしれない。

第二に、本書の中心的な分析目的は、2000年代のASEAN 商業銀行が「どのように変容したか」を財務データや銀行市場の競争環境、外資系銀行の動向から明らかにすることである。その点では、ASEANをリードするシンガポール、それに続くインドネシア、タイ、フィリピンの商業銀行を対象とし比較を試みようとした点は高く評価できる。その背景として各論では強調の度合いは異なるものの、政府の金融・銀行改革政策、外資系銀行の参入、デジタルエコノミーの進展を主に挙げている。しかしながら、本書後半の各国編で分析対象となったASEAN 商業銀行は主に大手銀行であり、中小規模銀行やイスラーム金融機関、マイクロ・ファイナンスなど中小零細企業や貧困層、イスラーム教徒などの資金需要に対応する金融機関は分析の主要な対象から外れている点に留意すべきである。もちろん複数国の金融機関を分析対象とするにあたり、分析の範囲を限定せざるを得ないことは重々承知しているが、今後、今回排除された分析対象にまで範囲を拡大するか、あるいは、

なぜ、大手商業銀行に分析対象を限定し、それ以外の金融機関を排除するのか積極的な理由付けがなされているのならば、さらに多くの読者を惹きつけることができると考える。

第三に、外国資本や国内資本による統合・合併や消費者市場の変化と、国内商業銀行の経営の変化との因果関係が明確でない点も指摘しておきたい。本書は、前者によって生じた銀行市場の変化に商業銀行が対応することで、商業銀行の経営戦略や収益構造が変化したという論理を立てている。しかしながらASEAN 諸国で起きているこれらの事象は同時進行している事象であり必ずしも因果関係は明確でないと思われる。国内の商業銀行の業態の変化が、国内外市場への新規参入のきっかけになるといったような逆の因果関係も考慮に入れるべきではないだろうか。

おわりに

2019年末に発生拡大したCovid-19の影響は实体经济のみならず先進国・発展途上国の銀行部門への影響も深刻とみられている。Covid-19の発生とそれに続く景気後退によりASEAN 商業銀行の経営も大きく変容することが予想されるが、本書で得られた度重なる外的ショックに対する国内商業銀行経営の対応・変容に関する数々の知見は、研究者および政策担当者、実務家にとっても掛け替えのないものである。今般の未曾有の危機に対して、本書がその「座右の書」となることを期待したい。

(齋藤 純・日本貿易振興機構アジア経済研究所)

後藤健太、『アジア経済とは何か——躍進のダイナミズムと日本の活路』中公新書、2019、ix+216p.

「アジア経済とは何か」。何を問うているのか分かるようで分からない、いささか謎めいた書名に導かれて本書を読み進めていくうちに明らかになってくるのは、「アジア経済」とは、単にアジア地域の経済を指し示す言葉ではなく、それ自体がひとつの経済現象であり時代現象である、という